

Living is sharing 生きることは分かち合うこと、弱者と

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
144
2020.7

公益財団法人PHD協会
2020年度会報144号

生きるとは
分かち合うこと
岩村昇

天然痘の少年を診察する岩村医師とヘルスアシスタント。(バギャブル部落)

「PHD 運動存続のための財政支援のお願い」のご報告とお礼

事務局長 坂西 卓郎=文
～分かち合い実践録～

4月末に上記「財政支援のお願い」のお手紙を会員、支援者の皆様に郵送させていただきました。大変ありがたいことに、7月1日現在、252件、9,469,420円のご支援をいただいています。改めてご支援いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

思い返せば4月初め、研修生及び関係者の皆様の健康と安全を第一に考え、水野理事長との緊急協議を経て、一年間招聘延期の決断をさせていただきました。詳細はP3からの「研修生招聘延期の決断に至るまで」に譲りますが、その決断により奨学金の辞退、各種助成金の辞退や返金という対応に追われ、運営にも先を見通せない暗雲が立ちこめてきました。正直なところ、気持ちが沈む日々でした。

皆様からの激励

しかしながら、冒頭にご報告させていただいた通り、多くの方にご支援をいただき、現在は2021年度研修事業再開に向けて動き出すことができます。その中で暗雲を取り除いてくれたのは財政支援もさることながら、多くの励ましのメッセージでした。

「コロナで大変な時ですが、がんばって下さい」

「危機を一緒に乗り越えましょう」

「共にがんばりましょう」

「応援していきます」

「この困難の時にどうぞふんばって下さい。長いお付き合いです」

「長いこのトンネルから早く抜け出せますよう。お祈りしています」

「苦しい時ですが、ご健闘を」

「Fight！」

「新研修生さん、来日できるよう祈ります」

「大変な活動を支えておられるスタッフの皆様、ありがとうございます」

「PHDさんのお仕事はとても意義あるものだと思います。頑張ってください」

「小さくともゼロではない」

「できることを続けることで道は拓けると思っています。どうぞ信じて進んで下さい」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ、コロナなんかには負けないで」

「PHD 運動の灯を絶やささないで下さい」

上記はほんの一部ですが、皆様からのメッセージに強く勇気づけられました。

コロナ禍の中、多くの方々が苦境に立たされており、大変なのは当会だけではありません。正直なところ、皆様に今お願いをしてもいいのかと悩みました。そんな中、私たちの背中を強く押してくれたのは会員の方からの「PHD 協会も緊急募金をして下さい」、「今だからこそ頼ってほしい」という言葉でした。「共に生きる」、「信じる」ということの真の意味を皆様から教えていただいたと思います。

また掲載しているように朝日新聞でも研修生招聘断念を社会的出来事として記事にいただき、こちらへも大きな反響がありました。

草の根交流 苦渋の延期



安心して行くのが願い

新型コロナ



2020年5月9日 朝日新聞

岩村先生がご存命なら今何をする？

そしてなにより岩村先生に関するメッセージもまた多かったです。

「コロナ危機に負けず岩村先生のご遺志通りご活動を続けられますようお祈りします」、「岩村史子様、PHDにつながる全ての皆様のご健康をお祈りしています」、「50年以上前に岩村昇先生の講演を甲南教会で聞きました。私の忘れられない思い出です」、改めて岩村先生や先達の皆様が遺してくれたものの大きさを感謝を持って感じさせていただきました。

物心両面で大きなご支援をいただき、研修事業再開だけでなくコロナ禍の今だからこそ必要とされる活動を模索することができています。その中で、大切にしているのは「岩村先生、今井先生がご存命であればどのような行動を起こしていたか？」という視点です。もとより浅学非才な私たちにお二人のような偉大な行動は望むべくもありません。とは言え、その足跡から学ぶことはできます。そこでP7よりPHD運動の原点を辿るために岩村史子さんのインタビューを掲載させていただきました。岩村先生であれば「じっとしていない」という史子さんの言葉は私たちの胸に刺さりました。コロナ禍の今こそ「共に生きる」という岩村先生のメッセージを体現すべく、ささやかではありますが、困窮している方たちのために以下の活動を実施しました。



国内におけるネパール難民申請者への支援（大阪入管での面会、物資提供）

国内で困窮しているミャンマーからの留学生への食糧提供

ネパール、困窮しているダリット約110世帯への食糧支援事業



上記の活動については現在進行形ですので、12月号で詳細をご報告させていただきます。特にダリットへの緊急支援は2018年度のサビナさん、2019年度のスシラさんが中心となり取り組んでいます。現在、帰国した研修生のフォローアップにも力を入れています。それぞれがコロナ禍の中、地域で奮闘してくれている様子が伺え、こちらにもまた勇気づけられます。

PHD 運動 100 年構想

「PHD 運動を 100 年続けましょう」、岩村先生の言葉です。その上衣の内ポケットにはいつも箸袋が入っていたそうです。「PHD 運動はいつでも、どこでも、だれでも、できる運動です。食事のときに使う割り箸は全部アジアからきています。緑がなくなり、伝染病を媒介する蚊はふえてきます。日本人が一日に使う割り箸分の木材で、家が何十件もできるのです。アジアの草の根の人を犠牲にした日本の繁栄であってはいけません。」

岩村先生が灯してくれた PHD 運動の灯、その灯は多くの人が共に薪をくべ続けており、コロナ禍の中でも消えるものではないということを実感させていただきました。奇しくも PHD 運動提唱から 40 年。60 年後の 100 年に向けて、岩村先生のご遺志を胸に、皆さんと共に歩んでいきたいと思っています。引き続きご支援、ご参加をよろしくお願いいたします。

PHD 研修生招聘延期の決断に至るまで

研修担当 山本 健太郎=文

いつもの春を待ち望んで

2020年3月上旬、昨年度の研修生3名が無事に帰国の途につき、来たる4月に向けて準備を進めていました。当初は新型コロナウイルス感染拡大への懸念は抱きながらも、例年同様、新たな研修生を迎えられると心のどこかで信じていました。

しかし、この時期以降、状況は急激に悪化の一途をたどり、コロナ感染は中国全土、欧米で猛威を振るい、日本をはじめ、

決断、研修生のいない一年

4月初旬、世界的な新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、事務局で今年度の研修事業について臨時会議を行いました。今年度の研修生招聘について、皆で協議を進め、考えられうる来日時期の候補として、主に以下の4点が挙がりました。

- ①既存の航空券での来日（4月中）
- ②来日 VISA 有効期限までの来日（5月末まで）
- ③秋招聘（来日は9-10月、研修期間は通常時より短くなる）
- ④1年間の招聘延期（2021年4月まで招聘見送り）

当会としては、できるだけ早く研修生を招聘したいという思いもありました。ただ、新型コロナの状況が悪化の一途を辿る中、彼らが仮に来日できたとしても、私たちを含め、色々な場に出向き、多くの人と交流を深める研修スタイルを実施することによって、お世話になるホームステイ先や指導者の方々にも感染リスクを広げてしまいかねません。

PHD 運動は、研修生と、彼らを支えてくださる皆さまのサポートがあって、はじめて成り立つ草の根の事業です。岩村先生が提唱されたこの運動は、そこに集う全ての人たちの手で、これまで39年もの間受け継がれてきました。当会の理念である「生きるとは分かち合うこと」、そこに人同士の豊かなつながりを

変わるもの、変わらないもの

コロナによって「変わる」世界、今まで当たり前だった日常がなくなりました。PHD 協会の元研修生たちからも、「村では、仕事を失ったことによる収入減で、食べるものがない人たちが数えきれない」という声を聞きます。私たちは、変化する社会の中で、今だからこそ人や社会にとって必要とされている活動を展開していきます。同時に、大切にしていきたい「変わらないもの」もあります。これまでの研修生一人一人が PHD 運動の宝であり、共に過ごした時間や築いた関係性は、簡単に消えはしません。厳しい現実がそこにあっても、元研修生たちは現地で活動を続け、今できることに精一杯取り組んでいます。彼らの奮闘を励みに、私たちも前を向いて生きていかなければならない、そう強く思います。

アジア周辺地域へと瞬く間に広がっていきました。PHD 協会の研修生の国々においても、都市や空港の封鎖、国内の移動制限といった強力な感染防止策が取られ、彼らの仕事や村での活動、食料の調達といった日常の生活にも影響が出始めていました。

この時、私たちが抱いていた新型コロナウイルスへの不安は、強い危機感へと変わりました。

生み出す魅力があったからこそ、多くの出会いの中に、この運動を支えてくださる方々の想いや研修生たちから学ぶ価値観や生き方に触れることができました。それは本当に言葉にできないかけがえのないものです。

だからこそ、眼前に広がる見えない新型コロナウイルス感染症が、PHD 運動とそこに携わる人たちを覆うことだけは避けなければならないと強く感じました。今、私たちが一番大事にすべきことは何か、守るべきものは何なのか、スタッフの間で話し合いを重ねました。

「危機管理の観点から「命」が第一、優先すべきは、研修生と彼らを支えてくれる方々の健康と安全。感染リスクが高い以上、通常の研修事業は実施できない。彼らを今招聘しないことが、PHD 活動に携わる草の根の人々を守ること、そして、この先の当会の未来につながる。」

上述の通り、今年度中の来日案も検討してはみましたが、ワクチン開発や集団免疫といった対策の見通しが不明な中、研修生を招聘することは難しいと判断しました。

こうして、理事長との協議を経て、1年間の研修生招聘延期の方針が正式決定となりました。そして、設立以降初めて、研修生のいない一年を迎えることになりました。

PHD 第38期 研修生の現状や心境

山本 健太郎=文

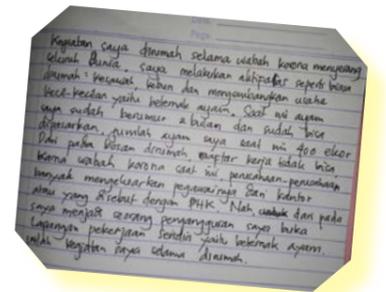
新型コロナウイルス感染拡大に伴い、研修生の招聘延期が正式に決まりました。今年度来日が予定されていた新研修生たちは今何を思い、どう日々を過ごしているのか、3人それぞれの心境に迫りました。（尚、文章はそれぞれの国の言葉で書いてもらったものを、日本語に翻訳して表記しています。）

セティア ブディマンさん（インドネシア、24歳）

ブディさんは、現地の大学で畜産学を専攻しました。日本では、牛や鶏の飼育全般、餌や栄養について勉強し、帰国後に自身が得た知識や学びを、地域の人々に広めたいと語っています。



「今年の4月に日本へ行けるのを楽しみにしていたので、残念です。私は今、家の田んぼや畑で農業をしながら、養鶏に励んでいます。全部で400羽いて、市場にも出せるようになりました。インドネシアでは、コロナで企業による労働者の解雇が続いていますが、私にはそれが無いので大丈夫です。今はとにかく元の状態に戻って、日本に行ける日を心待ちにしています。」

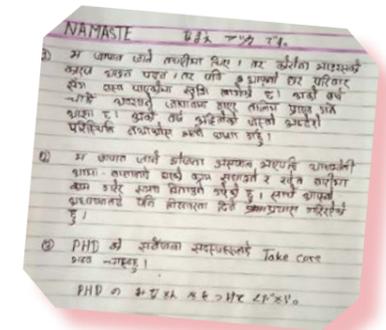


アシカ・チャルマカールさん（ネパール、23歳）

サビナさん（2018年度）、スシラさん（2019年度）に続く「ダリット」コミュニティからの研修生です。日本の保育や教育、そして助産のシステムを学んでみたいと意欲的です。



「日本に今年行けないのは残念です。今はコロナで、家で家族と過ごす時間が多いので嬉しいです。畑でトウモロコシを採ったり、自分で教育の勉強をしたりしています。来年はコロナの問題が収まって、日本へ研修に行きたいと思います。PHDの皆さん、お身体に気を付けてください。」

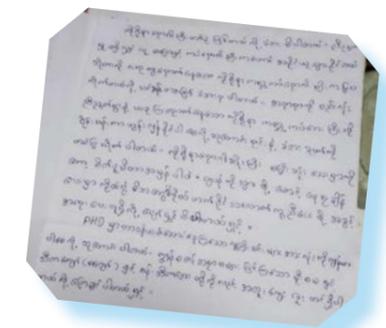


トートーウェイさん（ミャンマー、37歳）

マンダレー市街のスラム・バターで先生として活動しているトートーウェイさん。日本では主に教育や保健衛生（応急処置や病気予防、栄養）について学びたいと考えています。



「今年の春、日本へ行くために色々準備はできていました。でも突然コロナの問題が出てきて、自分の日本行きがなくなってしまった。とても悲しかったです。私はどうなりますか？日本へはもうずっと行けないの？と思いました。けど諦めないです。人生で大変な時は、たくさんあるから。コロナに負けないで、日本語の勉強も続けます。PHDの皆さん、待っていてください。」



PH 各国のコロナ事情

山本 健太郎=文

コロナで様変わりした世界、感染は今もとどまる所を知らない。
これまでの研修生出身国の感染状況と対策について、現地の元研修生たちの声をもとにまとめてみた。

インドネシア



感染者数 80,094人(7月15日時点)

4月上旬の首都ジャカルタでの感染爆発を皮切りに、大規模な社会制限(PSBB)を開始した。具体的には、マスクの常時着用や行事・集まりの禁止、ソーシャルディスタンス等の基本原則が課されている。4月末からラマダン(イスラム教の伝統的な断食)があったが、健康維持や感染予防の観点から、特にインフラや医療体制が脆弱な研修生の生活地域では注意が必要となった。生活面の変化としては、モスクでのお祈りができないこと、木曜市場に食品を買いに行けないことが挙げられる。



- 2/27 入国時に健康状態通告カードの提出
- 3/18 ビザ免除、アライバルビザ発給の一時停止
- 3/31 滞在許可所有者を除く外国人の入国・経由を禁止
- 4/8 ジャカルタでの大規模社会制限開始
- 4/29 ラマダン及びレバラン期間における帰省の全面禁止
- 5/7 空路での国内移動の限定的な再開
- 5/11 入国時に提出する健康証明書にPCR検査の記載が必要になる
- 5/25 ジャカルタ首都特別州における大規模社会制限の延長
PCR検査の結果が陰性であっても14日間の自主隔離措置
- 6/12 入国管理事務所の業務一部再開

ネパール



感染者数 17,177人(7月15日時点)

政府が3月下旬にいち早くロックダウンを実施したネパール。それ以降、感染拡大を防いできたが、5月半ばに状況が一変した。出稼ぎ大国としても知られ、首都カトマンズや隣国インド、他アジア諸国へ出向く人が多いが、コロナ禍で職を失った人たちが一斉に帰国し、それが原因で急激に感染が広がっている。彼らは今、出身地の地方に帰るも、仕事がなく食べ物もない等、深刻な生活困窮に陥っている。政府は「経済よりも命を守ることが優先」と、ロックダウン措置はいまだ解かれていない。



- 3/4 ネパール入国の際の健康証明書提出義務化
- 3/20 全ての国際線フライト運航の停止(3月末まで)
- 3/24 国内全土にわたるロックダウン措置開始
- 4/1 全ての国際線フライト運航停止延長
- 5/6 ロックダウンの延長(~6/2)
- 5/19 入国管理局の閉鎖延長(~6/14)
- 5/21 国際線及び国内線フライトの運航停止の延長(~6/14)
- 6/15 ロックダウン緩和の第一段階
入国管理局の再開

ミャンマー



感染者数 336人(7月15日時点)

最初の感染者が発表された3月下旬以降、比較的早い段階で、政府が陸空路ともに制限をかけ、都市部のヤンゴンやマンダレーを中心にロックダウンや外出禁止措置を取った。都市部から少し離れた研修生の地域でも、感染予防のためのマスク着用や手洗い、消毒が徹底されている。6月に入り、規制は緩和されたが、人々の緊張感が高く、今は村での得度式や結婚式、僧侶の托鉢ができず、保育園や学校も再開は7月からということで、先生も子どもたちも各自自宅待機を要請されている。



- 3/5 国際線到着の全ての外国人に検疫申告書提出義務化
- 3/13 人が集まる催しの中止(~4月末)
- 3/19 全ての外国人の陸路による入国不可
- 3/21 全ての外国人へのアライバルビザ, E-ビザの発給停止
- 3/24 国内初の新型コロナウイルス感染者の確認
- 3/29 入国ビザ発給の一時停止措置
国際線旅客航空便の着陸禁止措置
- 4/11 国外からの帰国者や感染者との接触者の隔離期間を21日間に
- 4/18 ヤンゴン、マンダレー地域などでの夜間外出禁止令
- 5/12 ヤンゴンにおけるマスク着用義務付け令
- 6/2 入国制限措置の延長

日々是 東奔西走

研修担当
山本健太郎

『~Last message~今伝えたいありがとう』

2019年度の第37期研修生3名が帰国し、早4カ月の月日が流れました。
彼女たちが帰国する直前、一人一人と最後のふりかえりの時間を設けました。
それぞれの思い・メッセージを含め、下記共有させていただきます。

プットリ ダリア (インドネシア)

「初めて日本に来た時、言葉とか文化とか何も分からなかった。でも研修に行って、いろんな人に出て、知識と経験ももらって、自信になった。一番大切だったのは、人との繋がりや縁、コミュニケーション。たくさんのお父さん、お母さんに出会えて、優しさと思いやりをもらった。私も村の人にこの気持ちをあげたい。日本での時間は言葉では表せない、感謝の気持ちでいっぱい。これから村の人たちと一緒に、健康な暮らし、女性の仕事づくりを頑張りたい。」

スシラ・バセル・サルキ (ネパール)

「PHDがあるから、私たち研修生がいる。もしなかったらこの研修の機会もなかったし、ダリットという下カーストのまま、自分の中で何も変わることできなかった。出会った皆さんから、いつもたくさんのお愛をもらった。後の人生でこのくらいのお愛や気持ちくれる人たちにはもう出会わないと思う。日本でのこと、一生忘れない。自分の家族にも、村の人たちにも、日本でお世話になった人みんなに村で頑張るところを見せたい。諦めないの気持ちを持って、私頑張ります。」

ゼンモーエー (ミャンマー)

「ミャンマーにいる時は自分のことばかり考えていた。大変なのは自分だけなんだと思っていた。研修をして、良いことだけでなく、日本にも問題があることを知った。大変な時も頑張っている人たちと出会って、自分も頑張ろう、何でもトライしたらできると思った。心がチェンジして、見える世界が広がった。村に帰って、自分が日本で学んだことを伝えたい。学生、他の先生、親たちともよくコミュニケーションをとって、みんなが良い学校にしていきたい。」

一年という旅路、山あり谷ありではありましたが、彼女たちは多くの出会いの中から得た学びや気付きを糧に、人としても大きく成長を遂げることができました。

PHD研修生を支えてくださる皆さまに感謝を込めて、本当にありがとうございました。



特集

～岩村 昇ならじっとはしていないでしょうね～

PHD運動の原点へ、岩村史子さんインタビュー

坂西 卓郎、濱 宏子 = 聞き手

中村 朱里 = 編集・構成



PHD運動を提言

昭和52年(1977)にネパールの山の中で原爆症の再発と思われる症状が現われてから、私は自分の死を身近なものとして感じるようになりました。この本をお読みくださっているあなたよりも、一足先に天国に帰らせていただきます。

(中略)

奇妙なことですが、私は死を思い始めてから生命が一層燃えてきました。古い譬えに、「消えようとするローソクの火が一瞬輝きを増すようになる」と言われるのは、このことかと思ったりします。私は神の元に召されるまでの日一日を、この地上に平和と健康の輪を広げるための人材づくりに献げようと考えました。そして、昭和56年(1981)の6月から「10パーセントの時間と、ポケットマネーを献げて、Peace = 平和と Health = 健康をつくる、Human Development = 人を育てる PHD 運動」を進めてきたのです。

宇宙から地球を見、その地球からアジアを見、アジアからネパールを見、ネパールの中で自分を再発見させていただき、そのネパールで発見した人生の原点から今の日本を見ると、このままでは日本は滅びてしまうのではないかという危機感にとらわれます。つまり、自分のことだけを考え、自分のことだけしていれば、それで夜が明け日が暮れる。そんな日本は、アジア圏に限らず世界各国から締め出されることは必至であります。アジアの草の根の人々から学んで、共に手を携え生きることによって、私とあなたが、日本が、アジアの一員として「宇宙船地球号」の乗組員として救われるのです。

「あなたの心の光をください

第二章あなたが主人公「PHD運動」P116～117より」

左記の通り PHD 協会は岩村先生が提唱された「生きることは分かち合うこと、弱き者と」、「各々の財、時間、能力の10%を平和と健康を担う人づくりに捧げよう」という PHD 運動を実践する団体である。その具現化として、研修事業を実施してきたが、コロナ禍により40年の歴史で初めて研修生招聘を断念することになった。今だからこそ PHD 運動の原点に立ち返り、今後の PHD 協会がどのように歩んでいくべきかを問い直したいと思う。

ネパールで結核、天然痘などの感染症と立ち向かった岩村先生が今ご存命なら、どのような行動を起こすのだろうか。岩村先生曰くベターハーフである岩村史子さんに聞いた。

Q. 世界、そして日本でコロナ禍が広まる今、岩村先生がご存命ならどうされているのでしょうか。

史子: もし、生きていて元気があれば、決してじっとはしていない。何をするかは分からないけど、どこかへ飛んで行きます。家にはいないでしょうね、多分。必要とされているところに行く。

Q. 今、公衆衛生の重要性が注目されている。岩村先生は公衆衛生と感染症が専門だった。

史子: そうですね。トイレづくりとか、公衆衛生の生活指導をしていた。トイレのドクターみたい。トイレがないから、みんな好きな所です。それでコレラとかがまん延するでしょ。簡単なトイレをモデルとして作って、指導していた。



結核キャラバン中の岩村先生



岩村史子さんインタビューの様子

Q. 岩村先生はネパールで結核の治療に取り組んでおられましたね。

史子: 病院には他の病気の患者さんもいたけど、結核が一番多かった。遠くの村から5日とか1週間とか歩いて、患者さんが来るというのはざらだった。これではだめだということで、結核キャラバンを始めた。そして、若い人たちを育てないといけないということで、病院の若い人を連れて行って、薬を渡すのを手伝わせていた。

結核キャラバンに行くと、いつ帰ってくるかわからない。それで、1週間後くらいに、ひょこっと帰ってくる。結核キャラバンから帰ると、シラミとか南京虫とかいろいろと持って帰るから、まず玄関前でストップ。(持参していた)寝袋も引っ繰り返して、きれいにしなければならなかった。

昇は、自分がネパールにいつまでいられるか分からないと考えていた。だから、地元の人に少しでも衛生教育をして、受け継いでいただきたいと。それで、あちこちにヘルスポスト(保健センター)を作ろうと一生懸命やっていた。ヘルスポストで簡単な喀痰検査ができたり、薬を渡せるように。医師の資格がなくてもできること。本当にネパールが好きだった。

Q. 結核キャラバンに出られている間は、心配だったのでは?

史子: もう生きて帰ってくればよいなと思っていた。今では村の人も携帯電話を持っているけど、当時は電話もない、電気もない、何もありませんよね。だから、祈るしかないですね。その時、強められたかな。



ある部落で顕微鏡で結核菌を見る岩村先生

Q. ネパールでは天然痘の大流行もあった。

史子: 天然痘がばっつとまん延した。病気が出ると、村の人が知らせにやってくる。村の人は足が速くて、山越え、谷越え、走ってやってくる。そういう知らせが来ると、飛んで行きます。ちょうどその時、日本からテレビ撮影の人たちが来ていて、その人たちと一緒に村に行ったことがある。テレビ撮影の人たちは、怖くて(患者に)近寄れなかったと言っていた。でも、昇は素手で治療したりしていた。

Q. 岩村先生ご自身が天然痘に感染するリスクもあったわけですが。

史子: 天然痘にはかからなかった。でも、しょっちゅう下痢はしていましたよ。ネパールにいたら、下痢なんて病気のうちに入らないですけど。



結核キャラバンの道すがら

Q. 改めて、岩村先生とは、どういう方だったのでしょうか。

史子: 我が道を行く。誰が止めようと。これしか言えないですね。その道が悪い道だったら良くないですけど、良い道だったので良かったです。

Q. その「我が道」の先にあるのは何だったのでしょうか。

史子: 自分のことを捨て置いて、その人のために何かできないかと考える。一つ一つもそうでした。家族も捨て置いて(笑)。病気の人だけではなくて、貧しい人、困っている人に目が行って、どうにかできないかと。そして、思いついたら走る。走りながら考える。目の前にいる人を放っておけない。頼まれると嫌とは言えない。

タイにいるときにも、ハンセン病の患者さんが道端にたくさんいる。そしたら、自分で傍にかがんで話をしたり。



村の子どもを診察する岩村先生



共に生きる為に
—生きるとは、分かち合ふ弱者と—

1998年12月9日
岩村昇



2000年10月 ネパール タンセンにて

Q. 困っている人を助けたら、お礼を言われることを期待する人もいます。岩村先生は?

史子 全然。お礼は期待しない。(助けた結果)立派な何かになったというときは喜ぶけど。若い人が成長していくとか。

Q. 若い人が成長するのを喜ばれていた。教育、人づくりということ?

史子: 教育者かな。自分が残すという気持ちはゼロ。でも、形として残るものは残しているかな。ヘルスポストをあちこち作ったのは、その中で人が育っているということを喜ぶわけで。別にそれは、ありがとうと言ってもらいたいという気持ちはないですね。



ネパールの子どもたちと触れ合う岩村先生



結婚25周年、娘達からもらった銀の水差しを手に

Q. 岩村先生は「世界平和を実現するには、一人ひとりが我慢して、その我慢した分を必要としている人たちと分かち合わなければならない」とおっしゃっていた。岩村先生も日常は?

史子 そうですね。M.C.ペレイラがディヨ伊予の会報*に岩村の言葉“Simple Living, High Thinking (生活は質素に。思いは高く。)”について寄稿してくれた。子どもたちにいつも言っていたんですよ。

色々な賞をいただいたけれど、賞金が家計に入ってきたことはない。そのお金をまた持って行って、活動に使う。本当に欲がない。

そして、最期は医学生のための献体でしょ。このくらい(骨壺くらいのサイズ)しか帰ってこなかった。神戸大学の献体のところに行くと、「お医者さんで献体する人は少ないですよ」と言われた。お医者さんは、解剖を知っているから献体しないのかな(笑)。でも、皆さんに本当によくしていただいて、幸せな人だなあと思います。

* 岩村先生ご夫妻は、ネパールの孤児12人を養子として育てられた。M.C.ペレイラさんは、養女の一人であるウマさんのお連れ合いさんで、岩村先生の遺志を継ぎ、ネパールでモデル農場や図書館プロジェクト等の活動に取り組んでいる。ディヨ伊予は、日本の民話のネパール語への翻訳、ネパールに絵本を贈る活動を行うグループ。史子さんが代表。

岩村先生のご経歴



- 1927年 愛媛県宇和島市に生まれる
- 1945年 学徒動員中の広島で被爆し、医師を志す
- 1947年 旧制松山高等学校に編入
- 1954年 史子さんと結婚。「とりとりの誓い」を捧げる
鳥取大学医学部を卒業
1965年まで同大学助教授を務める
- 1959年 伊勢湾台風。救援活動にて今井鎮雄先生と出会う
- 1962年 日本キリスト教会海外医療協力会(JOCS)からネパールに派遣
- 1980年 妻・史子さんと共に無医村に移住し、結核等の伝染病医療に取り組む
- 1980年 神戸大学医学部に教授として着任
- 1981年 サンパウロ国際大会にて第一回ロータリー国際理會賞を受賞し、PHD運動を提唱
PHD協会を今井鎮雄先生と共に設立
- 1986年 JICAの要請でタイ・マヒドン大学に公衆衛生学専門家として赴任
- 1993年 マグサイサイ賞を受賞
- 2005年 78歳で召天



結核キャラバンのメンバーと共に



未使用・書き損じハガキ

未使用テレホンカード

外国紙幣

どここの国の貨幣でもOK

外国コイン

台紙付き切手

使用済み切手

外国切手

未使用切手

切手の切り方

切手のミシン目(目打ち)や消印を残すように、1cmほどの余白を残して切り取ってください。

消印

1cm

1cm

集めていただいたものは...

◆ **未使用切手・ハガキ**

当会の会報、ご案内などの各種発送物の**郵送料**となります。

◆ **書き損じハガキ**

新しい切手・ハガキに交換後、当会からの案内など各種発送物の**郵送料**となります。

◆ **使用済み切手・外国貨幣**

1000円/kgで買い取っていただき、研修生の招聘・研修などの**活動費**となります。

◆ **未使用テレホンカード**

当会の**電話代**にあてさせていただきます。

物品の受領書については、希望者の方のみ発行しています。

ハチドリ電力に加入して、ご支援ください!

～ご家庭の電気料金の1%が研修生支援に～

PHDを支援する新しいメニューが誕生しました。ご家庭の電気契約をハチドリ電力に移行してもらうことで、月々の電気料金の1%がPHDへの寄付となります。それに加えて、お使いの電力がCO2を出さない地球にやさしい電気になり、地球環境への貢献もできます。



PHDと地球環境の両方に貢献できる一石二鳥な取り組みです。ぜひご検討下さい! 移行手続きや気になる移行後の電気代等、詳細はPHD協会またはハチドリ電力までお問い合わせください。

お問い合わせ：ハチドリ電力 092-402-1115 (平日 10:00-17:00)

毎月支払う
電気料金の1%が
NPOなどの活動支援に

無理なく続けられる
新しい応援のカタチです

みんなのひとしずくが
社会を変える

お申し込みは下記WEBサイトから

ハチドリ電力・PHD協会ページ
<https://hachidori-denryoku.jp/list/phd/>



たった5分で完了! 簡単3ステップ



2020年度新スタッフ紹介

中島 麻

広報・啓発担当



こんにちは。4月より広報・啓発担当をしている中島と申します。去年の夏まで、地元・尼崎にてオーガニックカフェを6年自営していました。それまでは、半年日本でアルバイト、半年外国でWWOOF(ウーフ)という、主に牧場や農場で働き、寝床・ご飯を提供してもらうという滞在をしながら旅をしていました。面白そうなことは、何にでも挑戦してみる人間です。PHD協会への入職もその一つとして、今までに想像もしなかった業務ばかりで、この会報も悪戦苦闘ドキドキしながら、作成しております。日々の生活では、家のDIYや草木染め、友人の有機農家へいっちょかみ手伝いをしたりと遊んでいます。目下の楽しみは、ベランダ菜園で固定種のミニトマトとキュウリの成長を見ることです。

研修生が不在というレアな年からの始まりとなりましたが、いかなる経験も自分の糧とし、目の前のことに取り組んでいきたいと思っています。よろしくお祈りします。

他己紹介

研修生不在という波乱の年に入職された中島さん。仕事では隣席、プライベートではアウトドア仲間、といつもお世話になっています。常に自然体で、何にでもオープンな姿勢が素敵です。多彩な才能お持ちです! 特にクッキング、手作りオーガニックケーキやさつま芋プリンは美味で絶品。これまでのPHDの素敵な広報物の数々に、中島さんのユニークなセンスとこだわりが加わり、どんな化学反応を起こすのか、ワクワクが止まりません。

研修担当 山本 健太郎

2020年度事業方針・計画

方針

直訳すると「外に手を伸ばす」ことを意味しますが、福祉分野では「支援が必要でもあるにもかかわらず届いていない人に対し、行政や支援機関などが積極的に働きかけて情報・支援を届けるプロセス」とされています。

「アウトリーチ」



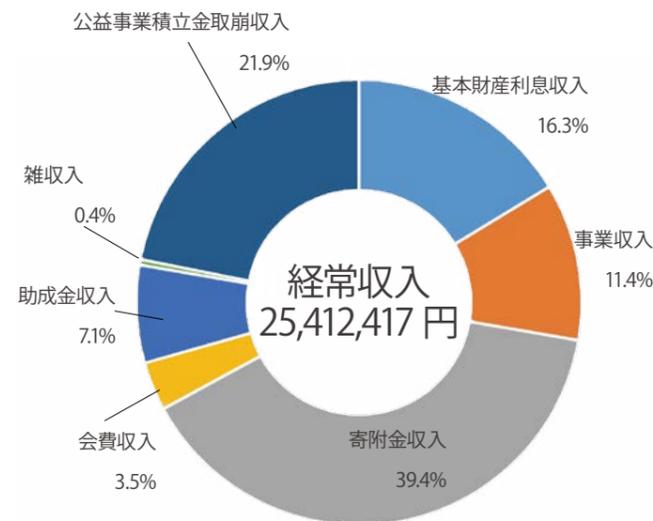
研修生招聘断念を受けて、上記の意味でのアウトリーチを国内外問わず行い、支援を必要としている人との出会い、そして支援を届ける機会を模索する一年としたと思います。次項の岩村語録に掲載したように岩村先生は「自ら出かけていく」ということを自らの役割とされていました。長田区への移転は「必要とされている人への積極的なアプローチ」の一つでもあります。今こそアウトリーチを実践し、「ともに生きる社会」を目指したいと思います。

研修事業

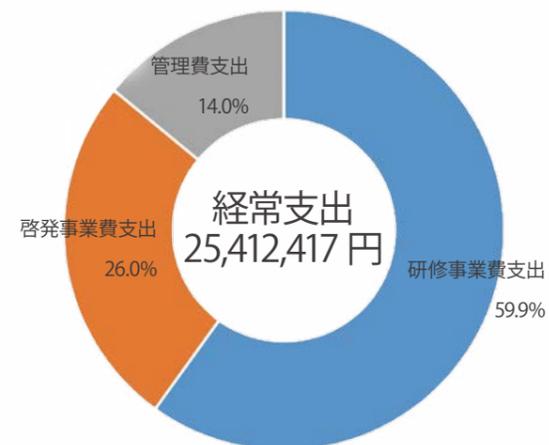
今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、通常の研修事業を実施することができません。現地にいる元研修生たちにとっても、コロナの影響は大きいと、彼らの現状や活動について、聞き取りやメッセージを通じてコミュニケーションを図り、より正確な状況把握に努めます。このフォローアップで得た情報を、当会のSNSや広報物でも広く発信し、社会に向けたPHD運動の共有にも繋げていきます。また、コロナ状況に配慮しながら、来年度の研修生招聘の判断材料を集めるとともに、ウィズコロナの生活を見据えた新たな研修事業スタイルの模索にトライします。

広報・啓発事業

2020年度は昨年度導入したクラウドサービスの運用を本格化させ、全体の情報共有と業務効率化を図ります。ホームページの拡充、SNSでの情報発信を増やし、コロナ禍における広報・啓発活動として、インターネットを最大限に活用します。PHD運動の認知度を上げるとともに、アウトリーチに関しての正確な情報を、支援者の皆様へ届けていきたいと思ひます。



2020年度 予算



PHD 活動紹介 2020年3月～2020年6月

3月	18日	日中友好協会 田所氏 来訪 (坂西、山本、中島)
2日	2日	兵庫県公益法人監査 (坂西、中村、古寺)
3日	3日	篠山ロータリークラブ例会 (演)
6日	6日	高砂ロータリークラブ卓話 (演)
		川西ロータリークラブ例会 (山本)
		公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金 ヒアリング会 (坂西)
7日	7日	研修生・活動支援金発表会 (坂西、八木、山本、芳田)
9日	9日	PHD協会 財務委員会 (坂西、中村)
10日	10日	37期研修生離日① (坂西、山本、芳田)
		認定NPO法人アイキャン 会議 (坂西)
11日	11日	ひょうごん運営委員会 (坂西)
		37期研修生離日② (坂西、山本、芳田)
		国内研修生 面接 (坂西、中村、濱、山本、酒井)
12日	12日	トラベルファイブ訪問 (坂西、八木)
14日	14日	ソティ例会 (芳田)
15日	15日	喜多野医師と協議 (坂西、濱、酒井)
18日	18日	学校法人大阪YMCA 評議員会 (坂西)
23日	23日	コープともしびボランティア振興財団 理事会 (坂西)
		定例スタッフ会議 (坂西、中村、八木、山本)
26日	26日	外務省民間援助連携室・富澤氏 来訪 (坂西、中村)
4月	4月	定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)
3日	3日	辞令交付式 (坂西、山本、中村、中島)
7日	7日	日中友好協会 田所氏 来訪 (坂西)
9日	9日	HYOGON運営委員会 (坂西)
14日	14日	ボーダレスジャパン ハチドリ電力会合 (坂西、山本、中村、中島)
15日	15日	多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー 実行委員会 (坂西、中村)
16日	16日	関西NGO協議会 新型コロナウイルス感染症に関する情報共有 (坂西)
18日	18日	HYOGON NPO×ICT勉強会 (坂西)
26日	26日	ひょうごみんなで支え合い基金 実行委員会 (坂西)
27日	27日	神戸親和女子大学 オンデマンド講義 (坂西)
5月	5月	078 KOBE Online (坂西)
2日	2日	神戸親和女子大学 オンデマンド講義 (坂西)
4日	4日	定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)
7日	7日	HYOGON松原明と考えるポストコロナの社会と市民活動 (坂西)
9日	9日	ミャンマー留学生生活実態聞き取り (坂西、山本)
14日	14日	日中友好協会 田所氏 来訪 (坂西、山本、中島)
		絵本作家 WAKKUN 来訪 (坂西、山本、中島)
		神戸親和女子大学 オンデマンド講義 (坂西)
		HYOGON 三役会 (坂西)
		多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー 実行委員会 (坂西、中村)
		NGO安全管理イニシアティブJaNISS「COVID-19勉強会」(坂西)
		ひょうご・みんなで支え合い基金 実行委員会 (坂西)
		HYOGON 実行委員会 (坂西)
		関西NGO協議会 総会 (坂西)
		神戸親和女子大学 オンデマンド講義 (坂西)
		PHD協会 監査 (坂西、古寺、中村)
		学校法人大阪YMCA 評議員会 (坂西)
		ミャンマー留学生に向けた緊急食糧支援 (坂西、山本)
6月	6月	神戸親和女子大学 オンデマンド講義 (坂西)
1日	1日	JICA関西会議 (坂西、山本、中村、酒井)
2日	2日	定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)
3日	3日	ソーシャルセクター緊急雇用マッチングイベント (坂西)
7日	7日	神戸親和女子大学 ZOOM講義 (坂西)
8日	8日	大阪出入国在留管理局 訪問 (坂西、山本、中島)
9日	9日	アユース「街の灯」トーク「より厳しい人に届くように-南アジアでの経験から」(坂西)
10日	10日	NPO/NGOの組織基盤強化のためのオンラインセミナー (坂西)
		多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー 実行委員会 (坂西、中村)
11日	11日	JANIC・NGO経営者限定 情報・意見交換会 (坂西)
12日	12日	職員研修「世界の屋根のひげドクター」視聴 (坂西、酒井、山本、中村、中島)
13日	13日	オンライン広報セミナー (中島)
16日	16日	アユース「街の灯」トーク「新型コロナで生活困窮に陥る移民・難民」(坂西)
17日	17日	岩村史子さんインタビュー (坂西、中村)
19日	19日	JANIC 総会 (坂西)
20日	20日	市民活動センター神戸 総会 (坂西)
22日	22日	日本NGO連携無償資金協力実施要領 オンライン説明会 (坂西、中村)
		HYOGON 総会 (坂西)
25日	25日	NPO/NGOの組織基盤強化のためのオンラインセミナー (坂西)
		コープともしびボランティア振興財団 理事会 (坂西)
		アユース「街の灯」トーク「ポストコロナに向けて、オンライン市民講座」(坂西)
29日	29日	定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)
30日	30日	NGO-JICA協議会 (坂西)

～自ら出かけて治療することこそ、自分の役割～

温故知新 岩村語録 その19



伊勢湾台風で被災した名古屋市内で救援活動をする今井鎮雄初代理事長(左から3人目)=1959年

1959年の伊勢湾台風の時のことです。
名古屋の下町は水浸しになり、被災者は救助隊とボランティアの人々による復旧と救援の作業を待っていました。この時、私もボランティアの一人として参加したのですが、そこで私は大変なことを学んだのです。当時、神戸YMCAの総理事だった今井鎮雄先生は、知多半島のはずれの漁村までトラックを走らせ、借りてきた小舟に衣料品や食糧品を積み、すでに軒先まで水が達している家々の屋根から屋根へと配って歩かれたのです。

「これが自分がめざしていた医師のあり方ではないか。病院で患者がくるのを待っているのではなく、困っている、苦しんでいる患者の元に自ら出かけて行って治療することこそ、自分の役割だ」

「出典：あなたの心の光をください アジア医療・平和活動の半生 岩村昇(1985年) P.62」



PHD協会設立につながる岩村先生と今井先生の出会い。今井先生の行動から「自ら出かけていく治療」というネパールにもつながる学びを得た岩村先生。今風に言えば「アウトリーチ」、このエピソードからいただき当会の2020年度方針とした。両先生を胸に活動したい。(さ)



PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT
公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 144号

発行: 公益財団法人PHD協会
住所: 〒653-0836 神戸市長田区
神楽町3丁目7-4
電話: 078-414-7750
FAX: 078-414-7611
E-mail: info@phd-kobe.org
URL: http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座: 公益財団法人PHD協会
01110-6-29688

◇ 新事務所のご案内

6月1日より長田区にて活動が始まりました。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。



PHD News

◇ お詫び

会報143号に誤記がございました。深くお詫び申し上げますとともに、下記の通り訂正させていただきます。

P12. 「PHD活動紹介」

今井鎮雄 初代理事長 召天日

【訂】 11月4日

【正】 11月3日

◇ 助成金受託のご報告

(1) 公益財団法人 庭野平和財団より、庭野平和財団 NPF プログラム“緊急助成”助成金の採択を受け、ネパール「ダリット」への食糧配給及び感染症拡大防止のための啓発活動を実施します。

詳細は次号にて報告させていただきます。

(2) 公益財団法人 神戸国際協力交流センターより、新型コロナウイルス感染症対策 外国人留学生支援事業 助成金の採択を受け、「アウトリーチ型外国人留学生生活支援事業」を実施します。

お近くに困窮している留学生の方が居られたら当会までご一報下さい。

◇ スタディツアー中止

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、2020年度の海外スタディツアーの開催を中止とさせていただきます。

◇ 国内研修生受入れ延期

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、2020年度の研修生招聘延期に伴い、予定していた国内研修生2名の受入れは、次年度へ繰り越しとなりました。

コロナ禍の中、PHD 職員は？

○月×日のPHD協会

職員 中村

急遽、全面在宅勤務へ。加えて夫の休業、子の休校もあり自宅で3密。小1息子の発案でベランダで昼食、ほぼ毎日。ギリガン家のほんわか日々。

職員 坂西

通勤を電車から自転車通勤に全面切り替え。事務所移転もあり、快適な海沿いの道を疾走。時々、山本とツーリング帰宅。互いの悩みを語り合う時間。

職員 山本

研修生不在ロス。研修生との喜怒哀楽がやりがい。それが無くなり、押し寄せる虚無感、家族欠けたような虚しさ、負けるな山本！立ち止まるな健太郎！

職員 濱

マスク着用。山本が常に監視、会う度に「濱さん、マスク！」と注意喚起。暑がりなのでマスク嫌いだったが、おかげで習慣化。母子のような二人。

職員 中島

約1年前に結婚。4月入職し、専業主夫から兼業主夫へ。変化は充実と四苦八苦の両面。時に夕食用の食材使用計画を間違っても、「まあ、しゃあないな」

以上、涼し気に夏を乗り越えそうな順



2021年PHD協会は創立40周年